南出和余『「子ども域」の人類学ーバングラデシュ農村社会の子どもたち』昭和堂、2014年

本作品は、バングラデシュの農村に生きる子どもたちの生活世界に対して、人類学的な参与観察に基づきつつ、オリジナリティ溢れる考察を加えた研究である。特に注目されるのが、「子ども域」という概念を設定して、大人社会との関係性および子どもの行為的主体性という視点から、現地での子ども社会を描出している点である。映像人類学的な手法を使っている点も斬新である。

「子ども域」とは何か。それは、子どもが社会の中に存在する関係性を指すのであるが、子どもの行為主体性を十分に考慮に入れつつ、大人と子ども、そして子どもと子どもの相互の関係性を捉えようとする概念である。著者は、バングラデシュの調査農村における子ども社会への参与観察に基づいて、当該社会の子ども観、そして子どもの生活世界を詳細に記述する。生活世界の記述では、年齢ごとに子どもたちの生活時間と生活空間の分析が行われ、年齢の上昇に応じる役割期待の変容と人間関係の拡がりが明らかにされる。さらに、著者は、子どもたちの主体的行為としての「遊び」の詳細な観察も行っている。また、遊びを通して「規範」が形成される事情も明らかにしている。こうした「遊び」の分析を通じて当該社会において大人は子どもに対して基本的に「無関与」であるという点が明らかになった。そのことを象徴的に示す言葉が、「ブジナイ」（分かっていない）という大人の子供に対する呼称である。

他方、子ども社会に対する大人社会からの制約として、通過儀礼としての男子割礼が取りあげられる。著者は、この儀礼の観察を通して、男の子たちは割礼の儀礼を受動的に受けとめるだけではなく、積極的に受容する側面を明らかにしている。また、村の大人社会からの子ども社会への関与とは異なり、村の外から子ども社会に影響を及ぼす要因として、教育も取り上げられる。結論的に言うと、教育は、当該社会の「子ども域」に変容を迫る要因となっている。

本作品が評価されるべき点は、以下の点にある。先行研究の把握、「子ども域」という方法概念の提出、現地調査の実践、分析の枠組み、民族誌的記述など、何れの点でも優れた研究成果となっている。結果的に、本研究は、「子ども域」という方法概念を使いつつ、バングラデシュの農村における子ども社会と大人社会の関係性を見事に描出することに成功した。それによって、大人は子どもを「ブジナイ」（分かっていない）と認識することによって、子どもに対して相対的に「無関与」に接しているけれども、それにもかかわらず、子どもは社会規範を半ば自律的に身につけていくという当該社会のある種の秩序形成が明らかにされたことが重要である。同時に、拡大しつつある教育という要因が、かかる「子ども域」にも変容を迫っている事情も明らかにしている。さらに、本作品は、日本における子ども社会の姿を読者に改めて考えさせる契機も与えてくれる点でも評価に値する。

以上により、南出和余氏の対象作品は、日本南アジア学会賞を授賞するにふさわしいものと評価することで審査員全員の意見の一致を見た。